

東京歌会（第六十一回）

平成二十九年十一月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、丸山弘子、松井淑子）。

六樫<sup>むつくぬぎ</sup> 八幡宮に会ひたるは大木と鳥、落葉ふみつ

布宮慈子

大木<sup>たいぼく</sup>と鳥は、ほかにはないということ、簡潔。この大木は、樫<sup>くぬぎ</sup>だろうか。六樫<sup>むつくぬぎ</sup>を、地名として、ここが下（句）に効いているという。

二十四年前のクラスの記録出づうしろにうたの数首のこして

中川禮子

前のクラスので二句。この記録、は作者じぶんのものだろう。うしろは記録のうしろ。教  
師生活もずいぶん前ことになる。やさしい歌。

雨の日のアーケード街に人多く異国の人らに賑はひてをり

丸山弘子

アーケード街は屋根がある。外国人には、折角のことで、雨を頓着してられないかもしれない。教  
ない。に、が重なるので、アーケード街は、としたい。異国の人ら、で観光客という掴み。

茶屋街を三々五々に歩みゆく制服の子ら修学旅行か

小野澤繁雄

下句、修学旅行か制服の子ら、と入れ替えたらい。あるいは、修学旅行の制服の子ら、と  
し言い切ってしまう。（大人が遊ぶ）茶屋街とのミスマッチ。

となり屋の刈りしほほづきもらいきて陽の射す畳に赤くころがる

市川茂子

となり屋の、はとなり家が、でいい。三句、もらいきて、からのながれでは、（赤く）ころがる、  
でなく（赤く）ころがす、とする。畳に手放し置いたものという。やや夕方感がある。

東京歌会（第六十二回）

十二月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首（一人が一首）十三首。  
出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

かそけきは落葉踏むこころ公園に東京大空襲の銀杏色づく

林 博子

落葉踏む、この落葉は櫛、桜か。銀杏は火に強いという。こころ、が下句に繋いでいる。春日通りは焼けた、など文京区出身者の話を傾聴する。この公園は日比谷公園だという。

みどりごは泣かずに目覚むかうかと西の果たての夕焼け紅し

布宮慈子

泣かずに目覚む、十分に眠ったのか。ここがいい。また、かうかうと、の位置もいいという。何かあるひろがりに向かう。そこにしみじみとした思いがある。

仲良きもときに疎ましひよら来て千両の朱実あらあらと食ぶ

丸山弘子

ひよ（鴨）ら、で一羽でないことがしれる。そのうちに、ごっそりとやられてしまう。あらあらと食（た）ぶ、よく見えている。正月前の千両である。

冬咲きの花鉢並ぶ庭先の色どりに赤きシクラメン足す

市川茂子

冬咲き（の花鉢）、（赤き）シクラメンで、季節は今どきのものだ。水やりのむずかしさややはり話題になった。庭先に色どり、というところが作者の思い。

煙体験がいちばん人気テント内小さき影ゆき影絵のごとし

小野澤繁雄

地域の防災訓練に子どもたちも参加している。煙を充填した仮設テント内（通路）を子ども

たちが腰をかがめて歩いている。そこを外から見ている。

白く細き鉄砲百合の園めぐり満州の苦をききに来にけり

中川禮子

聞きに来たのは、作者か。作者のところに、ほかのだれが来たのか。満州の苦は、いろいろに想像できる。ただ、上句全体の機能が説明されていないようだ。

目の前をふわりと一羽の雉鳩が掠めて入りぬ昏き木立に

大石久美

当日の即詠。雉鳩は都会のどこにでもいる、という。ふわりと、と、掠めて、のスピード感が合わないという。マンションの十一階住まいで、作者は情景がない、と云う。

### 東京歌会（第六十二回）

平成三十年一月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十二首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

齊藤茂吉が母恋ふるうた読みをれば母わからずと言ひし友あり

中川禮子

茂吉『赤光』には、一連（其の四まで、五十九首）「死にたまふ母」がある。三句、母わからず、が少しわからないが、母を幼い頃に失ったので（生き別れたので）記憶がない、といったあたりか。

角を廻るようには行かぬ人生の折り目節目の引きずる心

林 博子

角を廻る、で何か切れるようなことがあるのだ。節目節目、はあるが、ここでは折り目節目で上句を受けている。さびしい歌でもある。上手く詠っている。

今ちやうど月の山なりやさしさの曲線見する白き月山

布宮慈子

芭蕉が登っていて、「雲の峯いくつ崩れて月の山」の句を残している。夏季に残雪があることもしられている。月に射されているところか。高さはあるが、稜線はなだらか。やさしさの、で、山の在りようもしれる。

いづべにて元朝過ごしし雀らか蒔きたる飯のさむざむとして

丸山弘子

飯（いひ）。食べ残されている。元朝は、こちら側のことだが、何かさびしいことになった。さむざむとして、がよく伝えている。

街路樹の剪定されたたずまいまなかに見る冬空近し

市川茂子

街路樹は何だろうか。プラタナスだという声がある。剪定が必要になるような樹種。まなかに、は目の前に、の意味、万葉集にもある。さっぱりとした街路樹越しに、いかにも冬空になった。

雨の日の車内となりの立ちゆけば腿のあたりに残る湿り気

小野澤繁雄

となりの席の人と大腿が密着していた。その人が下車するのに立ったことで、しつとりとするものが大腿に残った、という歌。よぎなく親密を強いられてしまう都会の歌。

（報告…小野澤繁雄）